

私の好きな歌の一つに、クロード・ヌガロの『Vie violence』（邦題：人生と暴力）という歌がある。このタイトルは平坦に訳すと「暴力の人生」となるのだが、それでは次の「それは肩を並べている」という均衡の訳につながらないので不都合だ。そこで「人生⇔無法力」「天国⇔地獄」という相関図にしてみた。そのあとの「Amour et souffrance」は単語同士が「et」で結ばれているので並列的に「愛と苦悩」となり、この二つは「≐」かもしれないが必ずしも「＝」「⇔」ではないと理解できる。坂本龍一さんが「音楽と数学」はつながりがあると話していたが、この詩の表現には上記の他に「chair : chair」という言葉の数式がある。また詩の形式では一行の音節が他の行にも同等に規則正しく適用されていると美しいとされるが、そこまで厳密ではないもののこの詩の音節配列には一定のリズムがある。また見事に韻を踏んだ言葉の使い方は絶妙だ。優れた音楽とは正にこの数学的配列を持ったものである。何故なら数字は生命体の細胞を構成しているものだから。整った配列は心地よさを醸し出すだろう。

さて、では詩の意味について考えてみよう。「生きる」とは「暴力的なくらい荒々しいもの」で、そのエネルギーがなかったら生きていけない。そこには相関がある。

また詩の中の言葉通り、土があるから水が生まれ、水によって土が潤う。大気中の酸素があるから火が起こり、火の熱によって風は動く。自然界も相手があってこそ互いに存在できる仕組みになっている。人間界も同じことだ。歌い手がいる、聴き手がいる。売り手がいる、買い手がいる。発信するものと受信するもの、賛同するものと、反対するもの。それらのバランスがあって初めて相互の存在が成り立つ。何事もどちらか片方だけでは存在しえない。特に藝術は。互いに常に変化する生身の人間同士。その中でバランスを取りながら互いの人生をぶつけ合う。それが生きるということだ。

ところで、この歌の歌詞の中に「バレエの蝶」という表現がある。最初は「移り気な蝶のような旋回」を考えたが、そこで思い浮かんだのは『Le Papillon(蝶)』という1860年パリ・オペラ座初演のバレエだった。内容は「若いファルファラは老いた妖精アムザにかどわかされて侍女にされた。アムザは若い王子に恋をするが、王子はファルファラに恋をする。嫉妬に狂ったアムザはファルファラを蝶に変えた。ファルファラが松明の炎に身を投じると呪いが解け、アムザは報いで石になる。王子とファルファラはめでたく結婚」という真実の愛が成就する作品である。う～ん。何だか現代版「年増の女から若い男が逃げる」図が心に浮かぶ。中年女の執念は昔から怖い。それはさておき、この物語を念頭に置くと、歌詞の後半は「灯りを投げてくれ、私を点してくれ、君の純粹さで」という弱い意味ではなく「炎を投げてくれ、私を燃やしてくれ、君の純粹さで」という激しい意味として「蝶」に呼応する。「innocence」は「無実・無罪・潔白」「世間知らず・無垢・純粹」という強弱2系統の意味が迷いどころだが、松明に身を投じるほどの恋＝真実＝美しい＝無垢＝純粹という図式にした。

恋愛ばかりでなくあらゆる愛に苦悩は付き物だ。愛があるから苦悩がある。苦悩があるから愛は一段と輝く。来世の「天国と地獄」は現世の「楽園と修羅場」である。そして人は常に天国と地獄を両脇に抱えて生きている。その二つが土と水のように、風と火のように切り離せないものなら、互いに必要不可欠のものなら、両方と付き合い行こう。本当の人生を味わうために。真実の愛を手に入れるために。(2013.1.23)